含めここまで隣国のことを知らないことに、恥ずかしさを覚えた。これだけ地理的にも近く、文化的にも共通の部分は多くあり、インターネットを通じて情報がすぐ手に入る時代にもかかわらず、知らないことだらけだった。

新聞、テレビなどの報道では、領土問題や国家安全保障問題、爆買いなどの政治経済的なトピックがクローズアップされてしまうため、中国で暮らす人々の生活や、文化や歴史はあまり見えてこない。そのため、中国のことを知らない状態で、そのような報道を通じ、あまりよくないイメージが固まってしまう。固定観念を抱かず、偏った見方をしないためにも、実際に中国を訪れ、現地では食事や交通など、自分の普段の生活と関わりがあるようなことを体験し、人と話すなどをした交流をすることが必要ではないかと感じた。

本事業では、前章のような体験を通じて、私自身は沢山の貴重な経験ができた。この体験を地域、大学、高校などの母校で伝えていくことは私の使命だと感じている。そして、それをきっかけに実際に中国に行ってほしいと思う。今は格安航空券もあり、経済的にも行きやすい。言葉も筆談すれば通じるし、時差も一時間でとても行きやすい。これからの私の目標は、沢山の人に事業の成果を伝え、そして実際に中国へ行ってもらうきっかけとなることである。

日本に帰国してからも、現地で友人になった人とは、現在も中国版LINEのWeChat（微信）を通じて連絡を取り合っている。そこで交わされる内容で、「中国から日本に行く人は多いが、日本から中国へ来る人は少ない」という話をする。10年後には、「最近は地方まで遊びに来る日本人が多くなった」というような話ができるようになりたい。

最後に、この日本・中国青年親善交流事業に携わる全ての人と、お会いした方々に厚く御礼申し上げたい。

中国派遣を振り返って

山下 雄大

事業に参加するにあたって

私は典型的な理系学生として、普段は週に何度も化学の実験をこなし、複雑な化学の構造、びっしり並んだ数字と分厚い参考書と向き合う日々を過ごしていた。将来は化学技術士として日本のどこかの企業で働ければと漠然と考えており、一年前の私は日本と中国の関係どころか、世界の政治・経済事情、時事などに自ら目を向けたことなどなかった。いわば、私は本当に“無知無教養”な人間だったと思う。語学力が高いわけでもなく、大学生活を学部の勉強と莫大なレポートに費やす毎日。ある時ふと、そんな生活に違和感を覚え始め、現状を何とか打破したいという想いが強まり、日本・中国青年親善交流事業への応募に踏み切った。というのも、多くの中国人の友人に恵まれ、中国に対する理解をさらに深め、その認識を多くの人々と共有していきたいという思いが根底にあり、この事業は当時の自分にとって願ってもいない機会であった。そうして、七月の上旬無事に私の中国行きが決まった。

中国の首都　北京

中華全国青年連合会表敬訪問、KAB青年就職起業センター視察及び座談交流、在中国日本国大使館表敬訪問、中国国際青年交流センター訪問及び文化体験、商務部表敬訪問等の日程であった。私にとって今回が初の北京であった。私が北京を想像したとき、やはり一番に思い浮かぶのは大気汚染である。私の住む九州地方にもその大気が流れこみ、毎日「本日の各地域におけるPM2.5の濃度は～」と報道されているくらいである。人口13億の国の首都ということで、多くの車と人であふれているのだろうと想像していたのだが、目にしたのは、想像とは全く正反対であった。一面に広がる青空、渋滞もなく、人があふれてもいなかった。その静けさがむしろ不気味だったのを覚えている。その日は世界陸上北京大会の開会式であり、世界中から多くの人々が集まっていた。全世界の注目を浴びる晴れ舞台に雨や大気の汚染などあってはならなかったのだろう。話によれば、経済的に何10億という損を被ってまで、工場の運転を止め、交通規制まで行っていたそうである。ただ、理由はどうであれ、快適な環境の下で滞在ができたのは本当に幸運であった。

在中国日本国大使館表敬訪問が最も印象に残っている。現地に身を置きながら、大使館で働かれている山本恭司公使による講義を受け、後に質疑応答する時間が設けられた。歴史認識の違い、かつての日本・中国の政策、終戦70周年を迎えるにあたっての内閣総理大臣談話についてなど話題となっている問題が講義中で取り上げられた。中でも「私たちの外交という仕事の後ろには常に戦争がある」という、常に緊迫した日中関係の前線に立ち続けている山本公使の言葉には重みを感じた。確かに中国における日本の問題、逆に日本における中国の問題はそれぞれの国ですぐに敏感な「感情問題」へと発展してしまう。どうしても、冷静にお互いを見ることができず、客観的な判断ができなくなる。さらに、新聞やニュースなどのメディアの影響も大きく、そういった国民の感情が「国民世論」となり、両国の外交にも大きく影響を及ぼし、日中関係の溝が深まりかねない。現段階で、とてつもなく多様、そして巨大でまだまだ未知数の中国との友好関係を築いていくということはそう簡単ではないと感じさせられた。

北京の観光地　天壇の風景

人の温かさを感じた　太原

北京から約3時間、北京から南に位置する山西省太原。高速鉄道の車内を降りると、待機していた現地の青年連合会の方々から、竹林義久団長へ歓迎の花束が渡され、私たちの滞在が始まった。山西省太原は北京に続いて初めて訪れる場所であったが、内陸部の都市というこ